

週間ダイヤモンド 今週の一冊

北村行伸

平成 13 年 10 月 27 日号

「虹の解体」

リチャード・ドーキンス（著）

福岡伸一（訳）

早川書房 2001年7月31日刊

1960年代に描かれた21世紀の「鉄腕アトム」の時代では、輝かしい科学の時代を迎えることが当然のこととして語られていた。そこでは、科学の知識が普及し、人々は非科学的な迷信や狡猾なトリックには容易にだまされなくなるだろうと信じられていた。

いざ現実に21世紀に入ると、一方では確かに科学が人類の生活を格段に改善してきた。それは、ヒトゲノムの解読や、さまざまな遺伝子治療に基づく医療技術、コンピュータによる情報化、航空機を中心にした輸送システムの充実など枚挙に暇がないほど多くの分野で起こっている。しかし、他方、子供の科学離れ、数学嫌いが増加し、科学を学ぶということは、詩人の美意識を破壊することではなく、逆に自然に対する畏敬の念を呼び起こすことであるといふ観念が受け入れられなくなってきたことも事実である。

著者リチャード・ドーキンスは『利己的な遺伝子』で世界的な名声を得た生物学者であるが、本書は今日世界に蔓延する反科学主義的な考え方に対して、科学者の立場から、その誤解を解き、その上で科学における好奇心（センス・オブ・ワンダー）を喚起すること（p.8）を目指したものである。

著者の専門である遺伝子や進化論について論じた部分ではとっつき深い著者の洞察が見られる。例えば、6章で超能力や占星術の欺瞞を暴いた後で、人間の子供が何でも信じなければならぬ理由を次のように述べている。「人間の子供は、知識を食べる幼虫である。…幼虫がキャベツの葉にかみつくと、むさぼり飲み込むために強いあごを持っているのと同様、人間の子供は言葉などの知識を吸い込むために、大きく開かれた目と耳、それに空洞のような信じる心を持っている。子どもたちは大人の知識に吸いつき、飲み込む。寄せては返すデータの波が、何ギガバイトもの情報が、子どものおむつの隙間から勢いよく流れ込んでくる。そうした情報のほとんどは、親や先祖たちが築いてきた文化に由来しているのである」（p.193）。しかし、信頼に基づいて何でも信じ込むのは子どもとしては正常で健康的な性質だが、大人になるとそれが不健全で良くないだまされやすさになる可能性があるといふ。繰り返す。

9章の「利己的な協力者」に関する論考では、遺伝子レベルでは、すべてが利己的であるが、遺伝子の利己的な目的は、さまざまなレベルにおける協力によって達せられるという点を指摘した後で、「ここで遺伝子の視点に立ち返り、普遍的な共生「共に生きる」という考え方が遺伝子の最終的な結論である」（p.304）としている。この見方は経済学におけるアダム・スミスの見えざる手に極めて近い。遺伝子科学の最先端の考え方が、18世紀の経済学に近いといふことは決して偶然の一致ではないだろう。生物の社会性とは結局、利己主義と協調によって維持されるものだといふことである。余談になるが、2001年9月に始まった「新しい宗教戦争」は、科学進歩の恩恵を受けない

人々と、大きくその恩恵を受けている人々との間の戦いであると見ることができる。実際に土で作った家に住む人々や、ロバで荷物を運ぶ山岳地帯の人々に対して、最新兵器で攻撃をおこなう事ほど、科学進歩の間違った使い方はないだろう。そればかりか、この戦争は共生という遺伝子の結論にも反しているように思われる。

最終の12章では脳の進化をソフトウェア/ハードウェア的共進化として捉え、自己増殖的スパイラルを引き起こすソフトウェア革新は言語の誕生にあったのではないかという議論を展開している。そしてその言語を用いることによって、限定されたバーチャル・リアリティから、実際にはそこにはない事物をも脳が創造する限定されないバーチャル・リアリティへと進歩を遂げたということである。

ニュートンが虹の原理を解体したように、複雑に織り成す進化を巡る謎を解体してみせたのが本書であり、われわれの知的好奇心を掻き立てずにはおかない内容となっている。